

第十二回滑稽俳句協会報年間賞決定！

天賞 田中やすあき（埼玉県）

犬搔きの鼻先に来る夏の波

受賞の感想

滑稽俳句協会に入会させて頂き、まだ年月短き身ながら、この度、第十二回滑稽俳句協会報年間賞の「天」受賞の思いがけぬ連絡に、驚きと共に嬉しい限りです。

俳句を始めた頃より、選評してくださる方からの「面白い」との批評が、「鋭い」と言われるよりも嬉しかったので、滑稽俳句は自分に合っていると勝手に感じております。

受賞句については、小学校にプールがありませんでしたので、子どもの頃より泳ぐことには強い思いがあった気がします。そして海は渴望を満たしてくれる特別な存在で、決して泳ぎ達者ではありませんが、全身を自然界に開放させることは、なによりも心地良かったのでした。

本質たる滑稽俳句に、どのような未来が待っているのか想像出来ませんが、一人ではやはりここまで歩めなかったので、会員皆様に感謝し、これから少しずつであっても日々前進して行きたいと、盛夏に思っております。ありがとうございました。

地賞 北熊紀生（東京都）

霜柱踏まねば損をするやうな

受賞の感想

賞というものを生まれて初めていただくことになり、感激しています。子どもの頃、通学路などで霜柱を踏んで遊びましたが、大人が同じことをしたら変な人だと思われるのは確実です。

損をするように思っても、損をし続けなければならないのでしょう。

句作は、質よりも量だと思っています。たくさん作っていると、思っ

もいなかったような句が出てくることがあると思います。

今回の拙句も、そのようなもののうちの一つです。

一日に、最低五句は作ることを継続したことが、今回の結果に現れたのだと思います。(何年か前に「天」を受賞された方は、一日二十句くらい作られていたようです)

今後も、時に楽しみながら、時に苦しみながら、句作を続けていきたいと思っています。

ありがとうございます。

人賞 長井多可志（千葉県）

落葉にもA面B面ありにけり

受賞の感想

第十二回滑稽俳句協会報年間賞の「人」に選ばれ光栄です。ありがとうございました。

生まれも育ちも愛媛県。十八歳で上京し、俳句とは無縁の専ら仕事人間の半生でした。

ある時、同郷の先輩から「伊予人たるもの俳句の一つも詠めないでどうする」との一喝。渋々始めたのが余生の趣味となりました。

入会したのは、写生と伝統を重んじる結社。記憶の糸を手繰り、蘇らせた思い出と想像の情景を写生するという俳句生活です。

一方、昨年やはり郷里の縁で当会に入会しました。「俳句は滑稽なり」の本質を地でいく俳句に心が洗われます。

十五年前に亡くなった父は五十年以上、死ぬまで川柳を続けていました。その父が松山の先生から頂いたという雅号と滑稽精神を勝手に引き継いで、当会に投句をしています。

私にとって、東京の句会と松山の句会は、まさにレコードのA面とB面のようなものです。

選評 滑稽俳句協会会長 八木健

「天」…クロールでも、平泳ぎでもない「犬かき」がいい。犬かきをしているうちに、作者はいつの間にか犬になりきったのである。そして、

読者も、いつの間にかその鼻先が犬の鼻のように連想させられて愉快である。

「地」…霜柱を踏むのは冬の楽しみの一つ。硬過ぎず柔らか過ぎずのあの感触は、霜柱ならではのもの。一晩かけて自然が造った構造物を破壊する快感は、他では得難いものがある。巨人か恐竜になったような気分も楽しい。

「人」…落葉は自然の芸術である。その色鮮やかな表面をA面とすれば素っ気ない裏面はB面ということになる。葉に表裏があるのは当たり前だが、それをレコード盤に例えて面白い句になった。感じたままの素直さがいい。

令和五年八月号～令和六年七月号特選句

犬搔きの鼻先に来る夏の波	田中やすあき
わらつちやうくらい金持ち黄金虫	谷本 宴
私からこぼれたやうに花柘榴	山本 賜
水割に夏の音させショットバー	吉川正紀子
天守閣でんぐり返し夏燕	西野周次
無尽蔵の滝浴び心無一物	柳 紅生
夏草を雑草と呼ぶ大雑把	明神正道
我が影の我を離れぬ大暑かな	名本敦子
人間なのに羽根の付け根が暑い	赤瀬川至安
山開き石槌の山歳取らず	門屋 定
蛙にまだ告げてない田はやめました	鈴木和枝
この汗が生きてる証拠滴れる	吉川正紀子
怠けてもみんな猛暑の所為になる	藤森荘吉
枝豆で語る天下も身の上も	長井多可志

先頭のボスが引っぱり翳雲	井口夏子
神様のオンオフ蟬の鳴き止むは	吉川正紀子
台風や球種覚えてクネクネと	門屋 定
秋桜や女子会のごとざわめきぬ	卯之町空
神様は軽トラに乗り秋祭	長井多可志
天の川死は平等に訪れる	田中 勇
割り勘に端数のできて十三夜	田中やすあき
まるごとの栗が嬉しい栗ご飯	岡田廣江
秋の浜誰にも見せぬ膝小僧	谷本 宴
全山に放火たくらむ七かまど	峰崎成規
ガザの地を戦争で知る冬来たる	和田のり子
拙宅の補正予算で熊手買ふ	田中やすあき
跡形もなく蠮螋の食はれけり	小泉和子
新札へ替へる札なく年用意	峰崎成規
古典的貌に行きつく菊人形	工藤泰子
霜柱踏まねば損をするやうな	北熊紀生
落葉にもA面B面ありにけり	長井多可志
文化の日知事の失言じゃこ天の	沖枇杷夫
社会鍋小銭にかかる手数料	高田敏男
年用意掃除はさつささしすせそ	西野周次
終活や帯はバッグに返り咲き	井野ひろみ
盤上に勝負師の指秋澄めり	和田のり子
残り物集めて担ぐ福袋	山下正純
お飾の角度の調整エンドレス	千守英徳

いつぼんづつ広げて指の日向ぼこ	岡田廣江
海霧や誰が引きしか国境	北熊紀生
生ハムの薄さ際立つ冬ざれて	田中やすあき
「アレ」ってあれのことかな日向ぼこ	井野ひろみ
伊予柑を置いて私の予約席	八塚一青
焼芋や右手左手右手くち	月城花風
雁首を揃へ討たれし落椿	西野周次
シャッターもこの私も冬さびて	山本 賜
真犯人わからずじまい春炬燵	卯之町空
みつけたかくれんぼうの藪椿	吉川正紀子
春めきて空裏返すファルセット	工藤泰子
裏金がドカンと表へ闇の春	和田のり子
情報は穴から仕入れ春障子	高田敏男
戯言を次々空へシャボン玉	卯之町空
社員駒栄転左遷四月尽	青木輝子
おもちゃみたいな犬のお散歩春うらら	小笠原満喜恵
ドーナツの穴まで食べたと四月馬鹿	花岡直樹
歳時記のどこかにないか ^{うるう} 閏の日	赤瀬川至安
雛の眉描く細筆の息止めて	相原共良
館 ^{へそ} パンの臍春風にくすぐられ	田中やすあき
雷やおまへは空の地滑りか	井口夏子
熟年は完熟なるやトマト食む	沖枇杷夫
逃水に正面あるや ^{せな} 背ばかり	峰崎成規

生ぬるい風を濾過する網戸かな	八塚一青
花曇わたし優しい人になる	太田和子
放任主義の庭の青蔦のびのびと	加藤潤子
よく伸ぶる腕よ蕨へつぎつぎと	浜田イツミ
ガラスコップの影透き通る聖五月	桑田愛子
圧倒的に粒あんが好き柏餅	加藤潤子
アマリリス江戸の太夫でありんすか	敷島鐵嶺
空つぼの香水瓶にある青春	和田のり子
大夕立花壇の花に深情け	吉川正紀子
宅地化を厭ふひまはり手をつなぎ	横山洋子
打水の庭に日陰の色拵げ	柳 紅生